

かつて参勤交代の際に藩主が休憩に利用していた建物が、民泊施設として生まれ変わった。「Satoyama villa 本陣(サトヤマ ヴィラ ホンジン)」と名付けられた3階建ての木造建築は、長野県松本市の里山に新しい風を吹き込むべく、堂々と品よくたたずむ。

里山の本陣、殿様気分の宿

松本の木造建築、民泊施設に再生

長野県松本市四賀地区は山々に囲まれた風光明媚（めいび）な閑静な地である。この地区は、江戸時代には保福寺宿として栄えていた宿場町で、東西を貫く江戸街道は松本平から長野県上田市に至る主要道だった。その宿場町の中央あたりに、ひととき目を引く木造建築「本陣小澤家」が位置している。

建物は1908年（明治41年）に一度火災で焼失したが、1913年（大正2年）に復元再建した。ここ10年ほど空き家になっていたところ、所有していた小澤家の親族が、地域を再生する活動をする「アグリツーリズム四賀推進協議会」の活動の趣旨をくんで受け渡した。この地で生まれ育った同協議会代表の望月なつえさんは「本陣の典型的な様式を残している歴史的建造物を後世に残したい、残していかなければならないと思った」と語る。

リノベーションを終え2020年11月に「Satoyama villa 本陣」とし、民泊施設としてオープンした。運営するのは松本市で温泉旅館・扉温泉明神館などを手掛ける扉ホールディングス（長野県松本市）。同社社長の齊藤忠政さんは「この施設が里山の『異日帯』を味わっていただく拠点となり、地域の文化を継承していくことにつながる。観光を通じて地域が潤う一助となれば」と話す。

2340平方メートルの敷地内には母屋、離れ、蔵4棟が点在している。3階建ての母屋の間口は約20メートル。正面には玄関が3つある。間くと当時、向かって左側は殿様が、中央は家来が、右側のくぐり戸はその家の者が使用



していたという。左側の入り口には式台が設置されているが、殿様が籠からそのまま出入りしたのかと思われ、ふと目の前にある歴史を感じた。中に入ると、かまどや暖炉のある土間が広がり、左側には高さ約13メートルの吹き抜けのある板間があった。上を仰ぐと幾重にも組み合わされた梁（はり）と天窓が見えた。天窓の真下に立ち、仰ぎ見ると、降り注ぐ陽光を浴び、何か神聖な気持ちにさせられた。ここは共有スペースとし宿泊者がくつろげる場としている。また土間の奥に広がるダイニングでは扉グループのシェフが腕をふるい地元食材を用いた料理が振る舞われる、舌からもこの地を味わえるのだ。

それぞれソファやベッドが配されている。その奥には洋風のバスルームがあり、中庭も望めるしつらえだ。和室ながらもベッドがあるのは、できるだけ客の過ごす時間に立ち入らないようにする配慮から、布団の上げ下げをなくしているのだという。廊下より4段ほど階段を上るとこの間は殿様と家来が会議を行った部屋だそうだが、室内にある欄干やふすまなどから当時の殿様の様子がうかがわれ、そこに滞在している時間の中で、歴史を肌で感じられる。また各部屋には洗濯乾燥機も常備しており、連泊にも最適な環境が整えられている。数日この里山で生活をしてみるのもいいだろう。

了。建具に使われているすりガラスは現在ではこのレベルのものをつくれる職人がいないほどの作品だそう。古いものをできるだけ残しながら、現代の生活に合わせた快適性と安全性を考慮してリノベーションした。本陣を残し再生するにあたり、地域の人々も多く携わったという。建物内に残された荷物物の整理・搬出、荒れた庭の整備、館内の清掃など、ボランティアによる様々な尽力があったのだ。

参勤交代の休憩所 面影残して快適に

客室は全4室、その中の一つ「殿様ガーデンビュージュニアスイート」と名付けられた部屋は、最大4人宿泊可能で、10畳と15畳の間には

別棟は昭和初期に建てられたヒノキ造りの和洋折衷の建物となっていて、1階部分はステンボグラス細工を配したアールデコ調のインテリア

地域との連携により、この地の活性化とともに作られている。「自分たちが住む地域に誇りを持ち、住み続けられる街づくりをしていきたい」（望月さん）とも話す。

また齊藤さんは「今後は地元松本のクリエーターたちの力も借りていきたい。松本には良い人材があふれている。その人材を生かしたものを採用する。そういう取り組みでこの里山の再生の幅や深みも広がっていく」と語る。独り舞台ではなく、地域と共存することにより、その地を盛り上げることが大切だという。



建築学的にも注目されているこの本陣、古き良き四賀地区の姿を後世に残していくためのシンボルともいえる。この里山での滞在を通して訪れる人々の心を動かし、癒やしながら、歴史の重みを受け継いでいく。

（ライター 西岡直美）